
東方放浪録

レイフォルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方放浪録

【Nコード】

N5181X

【作者名】

レイフォルス

【あらすじ】

外の世界で生活維持の為に妖怪を狩る生業をしていた主人公が幻想入りしてしまうお話。

序章（１）

夜、時刻は９時ジャスト。都心は相変わらず喧騒が溢れていて、騒がしい。

仕事帰りのサラリーマン達が重たい足を引き摺り、派手な服装をしたチャラ男達はナンパ、点滅している信号を慌てて渡る者など。

その場所は、彼等にとっては何時も通ると言っていていい光景が流れていた。事件も事故もない、平和な場所である。

しかし、そんな彼等でもつい視線が釘付けになってしまつとある存在が、歩道の真ん中で立ち竦んでいた。

真っ黒な外套に身を包み、頭を覆ったフード。そして、顔には何ら装飾が施されていない白い仮面が付けられている。

体付きはほっそりとしており、華奢だ。括れたウエストにはベルト式の長方形なカードホルダーが下げられ、水仕事とは縁のなさそうな真っ白な手。

この街中で、その姿はあまりにも目立っていた。特に、口元に微笑を浮かべる仮面は気味が悪く、かなり趣味が悪い。

通行人はその人物と距離を取り、避けるかのように横を通り過ぎる。好んで不審者に近付こうとする人間はまず居ない。

……ハア、この格好、どう見ても不審者以外の何者でもないよなあ……。さっきから明らかに避けられているし。

まさか警察とか呼ばれないよな……？ 前の仕事で眼帯を紛失するのは矢張り不味かったか……。

まつ、今は仕方ないと割り切るか。仕事に集中しよう。

仮面を被った人物、如月きさらぎ 雪華せつかは胸奥で嘆息を零しながら、腰に巻き付けたカードホルダーに手を伸ばす。

留め具を外し、中から1枚のカードを取り出した。そのカードは裏が黒で統一され、表には絵と文字が書かれている。

それを無造作に天高く投げ飛ばすと、雪華は言霊を紡ぐ。

「多重次元結界、発動」

そう呟いた刹那、投げたカードが空中で静止し、重力を無視したまま宙で止まり続ける。そして次の瞬間

札から眩い閃光が放たれ、それは何もかもを一瞬に白で埋め尽くした。

その世界は、ある一部分を除いて何ら他とは変わらない世界だった。車、ビル、自転車、花、“物”はちゃんとある。

しかし、“者”はなかった。シンと静まり返った街だけが残され、それを作り上げた人間は誰1人としてこの場に居ない。

道路を走っていた自動車は、まるで運転手だけが消えてしまったかのように其の場で停止し、人の力で動いていた自転車はそのまま地面に倒れている。

子供が持っていた風船は空へと飛び去り、捻ったままの蛇口からは永遠と水が流れ続けている。

まるでゴーストタウンだ。静寂過ぎるこの空間は、「人類の滅亡」と言う文字を自然と彷彿させる。

だが、その静寂の時間も、直に終わりを迎えた。遥か彼方で、ボンと何かが爆発する音が微かに響いたのだ。

「来たな。アイリス、準備は出来ているか？」

「問題ありません。準備はバッチリです」

何時の間にか、ホントに何時の間にか、雪華の右横には1人の少女が立って居た。

真冬の空に降る雪のように白い肌。微かに紅く紅潮した両頬の間には、美しい淡紅色の蕾がちょこんと咲いている。

サファイヤの宝石を埋め込んだかのような透き通った双眸に、背を流れる艶やかな銀髪。

顔立ちはまだ幼さが残るものの、同時に端麗な容姿を持ち、何者も寄せ付けぬ程の鋭い雰囲気を感じていた。

「今直ぐにでも行動に移せます」

凜とした鈴の音の様な声で、雪華に無表情で返した。

序章（2）

「よし、そろそろ行くぞ。アイリス、何時ものを頼む」

「はい、マスター」

頷いたアイリスはスッと目を閉じ、意識を集中させる。すると、アイリスの姿がその場から一瞬で掻き消えた。

瞬きもする間もなく、消え失せたのだ。しかし、次に瞼を開いた時、其処には1台のバイクが鎮座していた。

空気抵抗を極限まで軽減する事に特化した鮮麗されたフルフェアリング。外装は黒で塗装され、隙間から見えるエンジンがいい味を出している。

外見は男なら誰でも乗ってみたいと思わせる程の物で、雪華も楽しそうな声音でバイクのシートを撫でた。

「カワサキのNinja250Rか。良いな」

「はい。以前に乗ってみたいと申ししていたのを聞いていたので」

声が響く。その声の出所は、そのバイク本体からだった。消えたアイリスの変わりに突然現れたこのバイクは、実はアイリス自身だ。

しかし、彼女はロボットではない。この変身には、アイリスの能力が深く関わっている。

アイリスは自分が目視した“物”を自分の姿に投影し、根本から作り変える事が出来るのだ。つまり、今は生きた機械とも言えよう。

一応は破損しても痛感はなく、人体には全く影響ないらしいのだが、木端微塵にされると流石に不味い。大部分が残っていれば元の姿に戻るが。

まあ、俺が居る限りアイリスは絶対に殺らせないがな。寧ろ、殺られる前に殺るわ。

それに、今回は色々と面倒臭そうなのが混じってるしな。大丈夫だと思っが、注意しておこう。

前方に広がる遠くの街並みを睨み付け、雪華は気合を入れ直した。

シートに跨がり、少しだけスロットルを回してセルフスクーターのスイッチを指で押し込む。

瞬間、エンジンが点火され、握ったグリップから振動が伝わる。マフラーからは二酸化炭素が排出され、それは大気に溶けて行った。

エンジンが動き始めた音を確認しながら、スロットルを大きく回し、エンジンを回転させる。マフラーからは轟音が轟くが、バイクは前に進む事はない。

エンジンの回転数をあげるものの、バイクは走り出さない。ギアが繋がっていないので、エンジンの動力が車輪に伝わらないのだ。

バイクの調子を確認めると、雪華は「ふう」と溜息を付き、身体
力を抜く。

「ノーヘルメットに外套……ね。事故ったら死ぬな」

「問題ありません。この私が付いておりますから」

「ははっ！ そいつは頼もしい」

軽口を叩き合いながら、左手でクラッチレバーを握り、左足でチェ
ンジレバーを踏み込む。

ギアをニュートラルから1速[□]に切り替え、クラッチレバーを半クラ
ッチにしなが、スロットルを回す。

そして、バイクは走り出した。ある程度の速度まで達するとクラッ
チレバーを切り、チェンジレバーを蹴り上げて2速^{セカンド}にギアを入れた。

序章（3）

1台のバイクが灯火が消えた大通りを疾走し、エンジン音を轟かせながら爆走する。静寂が支配する街中ではその音は通常の倍ほど響いていた。

そのバイク（アイリス）に乗った雪華は吹き付ける風を仮面でガードしながら、精神を集中させ、索敵しながら突き進む。

不気味な仮面を被った人物がバイクで走る姿はかなりシールドと言えよう。

「……そろそろか。アイリス、運転を頼むぞ」

「了解しました」

雪華がスロットルから手を離すが、スロットルは戻らない。元々このバイク自体がアイリスな為、自分を動かして当たり前だ。

離れた右腕を何も無い空へと伸ばし、「武器庫」と呟く。その瞬間、何も存在していなかった筈の空間にパカッと真っ黒な穴が出現し、雪華は躊躇う事無くその穴に腕を突っ込む。

あれ……？ おかしいな。確かこの辺りに入れといった筈なんだが、何処にやったかなあ……。

前には此処に置いた筈なんだが、見付からない。あつ、そうか！
この中に仕舞ったんだった。

これはまた整理しないと駄目だな。一々取り出すのに時間が掛かる。第三者的視線では肘から上が切れている様に見えるかもしれない。そして、雪華がガサゴソと中を漁る様に腕を動かすと、その穴から何かが出て来る。

その取り出した物は、一振りの刀だった。鞘に巻き付いていた紐を解き、左腰に強く巻き付けて佩刀する。因みにカードホルダーは右腰だ。

「さあて、今宵の狩りの始まりだ!!」

そう叫んだ刹那、突如真横の一軒家が吹き飛び、粉塵が舞う！飛来してきた建造物の破片をアイリスが左に逸れながら避ける。

「最初の獲物は何だ？」

土埃が舞った背後をミラー越しに覗き見ると、建物を破壊した正体が露わになった。

馬車に使われる様な木製の車輪。その車輪からは火炎が吹き出し、ソレが走った後の地面は燃えている。

そして、それに乗る猫。これが唯の猫だったのなら、実に可愛らしい光景なのだが、現実には甘くない。

鋭く伸びた鋭利な爪に、開いた口から見える牙。目の焦点は合って

おらず、ダラリと長い黒い舌を垂れ流している。顎は涎でベチャベチャだ。

「火車^{かしや}か！！ しかも多い！？」

次々と列を成して追ってくる火車。その数は見える範囲でザッと20ぐらいはあった。おまけに相当デカイ為、雪華の5メートル後ろは地獄絵図である。

因みに、「火の車」とは仏教用語の「火車」を訓読みした語だ。火車とは字の如く燃え盛る炎の車であり、地獄の獄卒が亡者を乗せて運んだり、或いは責め具として使われる。

亡者が火車によって責めさいなまれるところから、転じて家計が苦しい状態や経済状態が困窮している状態に対して用いる語となったのだ。

どの家庭の家計も今は火の車であろう。この車に乗ってしまうと容易に降りることができない。只管根気強く浪費をせず辛抱するしかないだろう。

そして、日本各地には「火車」という妖怪が伝わる。獄卒が亡者を乗せて地獄へ運ぶという思想から、葬式や墓場から死体を奪うといわれる。多くの場合その正体は猫だ。

「生憎と、死体になって運ばれる予定はない！！」

アイリスに速度を上げる様に促し、火車共を引き離す。ある程度距離を取るとUターンし、そのまま火車の群れに突っ込んで行った。

序章（４）

右手を柄に添え、左手は鞘を掴む。眼前に迫りつつある火車共との間合を計る。

そして、一定の距離に差し掛かった時、親指で鰐を弾き出し、僅かに露わになった刀身が月光によって煌めく。

「行くぞ、化け猫共オ！！」

抜き放たれた雪華の刃が、先手必勝とばかりに奔る。常人では決して捉え切れぬ程の迅さで銀の線が宙を駆け抜ける。

先頭の化け猫が乗っている火車の車輪を切断し、瞬間的な摩擦で火花が散る！

「ぶにやあああああああ！！！！！！」

化け猫は悲鳴（？）を上げ、バランスが崩れた火車は地面を擦りながら斜めに逸れ、ビルに突っ込んだ。

「我が一刀に……断ち切れぬモノ無しッ！！」

嵐の如く刀閃が迸り、銀の狂気が化け猫共に襲い掛かる。一閃一閃、高速で不可視の一撃が放たれる度に大気が唸り、木材が飛び散る。

ある者は中央から一刀両断され、ある者は首だけが飛び、ある者は火車を破壊されて地面を転がる。

力による暴力、その光景は一方的だった。刹那の交差の後には破壊
尽くされた火車と化け猫。まるで台風が過ぎ去った跡の様だ

「ふう、やれやれだ」

「お疲れ様です」

アイリスから掛けられた労いの言葉に頷き、身体力を抜こうとし
た雪華の視線に、遙か彼方で一瞬、銀光が瞬くのを捉える。

そして、ソレは恐ろしい疾さで飛来し、目前まで迫っていた。

「っ！？ シッ！！」

刀を横に風ぐ。キイインと鉄と鉄がぶつかり合う澄んだ音が響き、
雪華は少しだけ眉間に皺を寄せる。

高速で飛んできた鉄塊の軌道を何とか横へと逸らし、別の方向へと
弾き飛ばす。

無理矢理ベクトルを変えられても尚、その威力は凄まじく、地面を
抉りながら数十メートル突き進んだ。

痛うゝ……腕が痺れた。今のは気が付かなかったら危なかったな。

しかし、一体何処から飛んできた……？ これだけ重量のある鉄の
塊……良く投げられたな。

痺れた腕をヒラヒラと振りながら、鉄塊が飛んで来た方向へ顔を向ける。遙か先、ビルの屋上には1体の巨大な妖怪が佇んで居た。

頭に1本の紅い角を生やし、尖った牙。あれで噛み付かれれば、その部位事引き千切られるのは容易く想像出来る。

指には斬り裂く為だけを考えて長い爪が伸び、虎の毛皮の様な物を腰に纏っている。身体全体は紅色で、ゴツゴツとした顔は強顔。

右手には雪華に投げた鉄塊……いや、鉄尖棒が握られていた。

「鬼、か。アイリス、今回は俺が奴と戦う。お前は待機していてくれ」

雪華はバイク（アイリス）から降りると、赤鬼を見ながらそう呟く。

「了解しました。待機モードに移行します」

アイリスは特に異論はないようで、速やかにその場を離れて行った。

序章（5）

対峙する2つの影。1つは漆黒の外装で全身を包み、顔には趣味が悪い白い仮面を付けられている。

悠然とした動作で、抜き放っていた刀を鞘に納めると、凜と、鐔が鞘に当たって綺麗な音を鳴らした。

腰を低く落とし、手を柄に添える。居合斬りと呼ばれる構えをし、眼前に立ち尽す敵を睨み付ける。

そしてもう1つの影は、一言で言うなら巨躯。戦闘に特化した肉体は極限にまで鍛え上げられ、その巨躯に見合った巨大な鉄尖棒。

口から緑色の瘴気のような息を吐き散らし、そして

「

ツツツ！

！！！！」

身も凍る程の悍ましい咆哮を天に向かって上げる。いや、そもそもこれは猛獣が上げる咆哮とは言えないかもしれない。

もつと別の何か、戦士が自分を奮い立たせる為に上げる雄叫びに近い。雪華は沸々と滾る高揚感を感じながら、何故だがそう思う。

その咆哮からは狂気、全てを壊したいと言う残虐な意思は感じられない。唯純粹に、己の武を試したいと言う意思だけが感じ取れたのだ。

故に、恐怖は雪華にはなかった。この戦いで破れ果てても寧ろ、本望とも言えよう。それだけの強者なのだ。

……面白い、面白いな。唯の鬼の妖怪だと思っていたが……この威圧感、幾多の戦場を潜り抜けてきた者と同等か、それ以上だ。

コイツは俺も少し本気を出さないと、直に殺られそうだ。久々に満足のいく死合いが出来る。

つつても俺は戦闘狂じゃないが、まあいい。今は唯、純粹にこの出会いに感謝しよう　　！！

御互いの殺気が溢れ、それは空气中で爆ぜる。膨大な殺気の衝突に空間が軋み、重力が増したかのような感覚に陥った。

先に動いたのは、赤鬼からだった。その巨体からは想像できない程の速さで飛躍し、鉄尖棒を振り落す。

勢いを乗せたその一撃を抜刀した刀で受け止め、力の流れを横へと流す。真面に衝撃を受けたら刀が簡単に押し折れてしまう。

「ハアアツ！！」

同時に刀閃一閃。身体を半歩踏み込み、ガラ空きの鬼の身体に刀を振り抜く。

煌めく銀光が奔り、視認の難しいその一太刀を、鬼は難なく受け止

め、捌いた。だが、銀の世界はまだまだこれからだ。

圧倒的な疾さで刀を振るい、空が銀を滑る。迸る銀の嵐を何とか捌きながら、鬼も負けじと鉄尖棒を振う。

疾さでは雪華、一撃の破壊力なら鬼。後者の方が有利に思えるだろうが、雪華は的確に相手の急所を突き、体力を奪う。

少しずつだが、鬼の身体に斬り傷が増えていき、段々と動きも鈍くなって行った。

「

ツツツ！！！！！！」

咆哮を上げ、一旦距離を取る鬼。雪華は追撃はせず、相手の出方を窺った。

ん？ アレは……成程。アイツは本来の得物は2つ。二刀流ならぬ二棒流なのか。

なら、次で決着が着くかもしれないな……。

跳び引いた鬼の足元には、地面に刺さったもう1つの鉄尖棒が在った。最初に雪華に投げ付けた物だ。

それを左手で持ち上げると、準備万端とばかりに鼻を大きく鳴らした。

「そつちが二棒流なら、俺も二刀流で行くぞ」

刀を左手に持ち替え、右手をカードホルダーに伸ばす。其処から1枚のカードを取り出すと、カードに書かれた名前を呼ぶ。

「稲妻刀・雷絶、起動」

言葉を発した瞬間、稲妻が掌を駆け抜け、カードは細切れになる。

バチバチと掌から耳鳴りがしそうな轟音が轟き、帯電するが、雪華は涼しい顔をしながらその光景を見詰めていた。

四方八方に弾けていた稲妻は臆て、一箇所に凝縮すると、それは一本の長い線へと成る。

先端は切先の様に反り、刀と同じ厚さの刀身。柄はなく、稲妻其の物が一振りの刀と化していた。

序章（6）

静寂。雪華と鬼の間を通り風が吹き抜け、フードを静かに揺らし続ける。

一時の沈黙。絶え間なく鉄と鉄が激しく衝突する音が止み、今は闇色の穏やかな世界を演出している。

しかし、その世界も、直に終わりを告げた。どちらともなく腰を低く落とし、得物を構え、殺気を滲み出させたのだ。

そして、両者の姿が一瞬でその場から消え失せた！ 否、消えたのではなく、道路をまるで滑るかのように肉薄し、そして、激突した。

鬼が、音速を超えた鉄尖棒を振るい、雪華は屈む動作だけでそれを避ける。

頭上をブオンと高速で鉄尖棒が通り抜け、嫌な汗が背中を濡らした。
一発でも当たれば粉々、即ち死である。ゲームオーバー

雪華は屈んだ状態から身体を独楽の様に高速回転させ、稲妻刀で鬼の胸を斬り裂く！ 鬼の胸から黒い血飛沫が飛ぶが、致命打ではない。

回転の勢いを利用したまま左手の刀で鋭い突きを放つ。空気を斬り裂き、突き出る一撃を鬼は捌き、突きを放ったことによって流れた身体を雪華は慌てて戻そうとする。

その隙を鬼は見逃すはずもなく、両手の鉄尖棒を高く高く振り被り、落とした
！！

しかし、雪華の表情は慌てる所か、ニヤツと意地の悪い笑みを浮かべている。その姿に、鬼の脳内で危険信号がフルに鳴り響いた。

だが、時は既に遅し。全ては、大振りな一撃で止めを刺そうとするこの一瞬の為。それを裏付けるかのように、既に懐に入り込んでいる雪華。

ワザと隙を作り、大振りな一撃で止めを刺そうとする鬼を誘い込んだ。けれど、それでも鬼は諦めない、両手に力を込め、目の前の敵を粉碎せんと鉄尖棒を落とす。

「空牙一閃！！」

最後に一際大きな金属音が響き、刹那の交差を終えた。互いに背を向け、その場を立ち尽した。

何かがパキパキと割れる音がする。鬼が持つ両方の鉄尖棒に輝が入り、それは徐々に広がっていく。

臆て、それは意図も簡単に砕け散ったのだ。鉄の破片が地面に落ち、ガシャンと派手な音を響かせる。

そして、鬼の身体からも一気に血が吹き出した。人の血ではない、真っ黒い血液が……。

右肩から左腰までザツクリと斬られ、断たれた上半身は臍腑を垂れ

流しながら下半身から崩れ落ちる。

ベチャツと潰れるような不快な音を出し、立ちっぱなしだった下半身も追う様に倒れた。

「……ふう〜」

其処で漸く、雪華は身体力を抜き、重たげな溜息を吐いた。右手の稲妻刀を消滅させ、刀の切先に付着した血を払う。

そして鞘に戻すと、背後を振り返らずに歩を進めた。

雪華がその場を去った後、其処には鬼の死体だけが取り残されるのだった。

序章（7）

鬼を倒し終えた雪華はそれから、待機させていたアイリスと合流し、現在とはある日本屋敷の前に来ていた。

跨っていたバイクから降り、巨大な屋敷を見上げる。

あー、しかし、何時見てもこの屋敷はデカイなあ。使用人も多く雇っているし、あの金は一体何処から出て来るんだか。

まっ、金がある人の贅沢かね。御蔭で俺も不自由なく暮らせていしなあ。

屋敷は四方を何十メートルもの高さがある塀に囲まれ、その奥には城の様な形をした建造物が鎮座している。

一応はこの屋敷は住宅街にあるのだが、其処等にあるどの家よりも大きく、そして目立つのだ。

アイリスはバイクから元の人型に戻ると、雪華の隣に移動する。横目でそれを確認した雪華は、アイリスに労いの言葉を掛けた。

「無事に終わったな。アイリス、今日も苦労さん」

仮面に付いた2つの穴からは微かに細まった双眸が窺え、彼の手はアイリスの頭に伸びる。

そして、サラサラな艶のある銀髪をクシャクシャに掻き混ぜて、綿の様な髪感触を楽しんだ。

「い、いえ、私は今回は何もしていませんからっ」

終始無表情を貫いていたアイリスは、この時ばかりは表情を表に出
し、頬を赤く染めながら慌てる。

アタフタと両手を身体の前で振り、頭を撫でる雪華の手から逃れよ
うと後ずさった。

しかし、それを雪華が許す筈もなく、左手でガツチリとアイリスの
背に腕を回し、抱き締める形で頭を撫で続ける。

だが矢張り恥ずかしいのか何度も脱出しようと試みるが、雪華の絡
まった腕はそつとやちよつとぐらいじゃ外れない。

直ぐに無駄だと悟ると、臆てはなされるままになるのだった。

「あうあうあう……」

解放されたアイリスの顔は羞恥で真っ赤になっており、それを指摘
すると「見ないで下さいっ」と言われ、顔をバツと背けられた。

雪華はニヤニヤしながらそんなアイリスの反応を楽しむ。

アイリスは普段も喜怒哀楽が表情にあまり出ないけど、本当は感情
もしっかりとある。

唯、感情を表に出すのが苦手だよなあ。それ故に、他人からは淡泊と仕事を熟す機械の様だと良く言われるが、俺はそうは思っていない。

撫でれば照れるし、褒めれば喜ぶ。他の奴等と何も変わらないし、これでも結構従順で、可愛い子だ。

まっ、今更他の連中がどう思うが、俺達には全然関係ないけどな。

「さてと、んじゃあそろそろ結界も解くか。解除！」

アイリス成分を十分に補給した後、そう叫ぶ。今まで静寂だけが支配していた街に音が戻り、存在していなかった人が漸く戻る。

いや、この場合は雪華達が現実世界に戻ったと言える。

序章（８）

雪華とアイリスは現在、屋敷の長つたらしい廊下を歩いて居た。

目の前には和服に身を包んだ、所謂和服美人さん（使用人）が道を先導し、その後を雪華達が付いて行っている。

暫く歩くと、和服美人さんとはある一室で止まり、背後の雪華達に振り返った。

「此方で絹恵様きぬえが御待ちです。どうぞお入り下さい」

和服美人さんはその一室を手で差すと、そのまま何処かへと行ってしまう。

雪華は躊躇なく襖を開け、ズカズカと中に入って行き、その後をアイリスが続いた。

中に入ると、一人の御老体が畳の上に正座し、テーブルの上に載っている羊羹を爪楊枝で突いていた。

入室してきた雪華を一瞥すると、隣に置いてあるお茶をズズと啜る。

「婆さん、今日の仕事が終わったぞ」

「ああ、何時もご苦労さんだねえ　ほれ、今日の分だよ」

懐から封筒を出し、テーブルの上に滑らせるようにして置く。封筒

を受け取ると、雪華は中身を確認する。

その封筒の中身は、金だ。雪華達は妖怪を狩る事によってクライアントから金を得て、それで生計を立てている。

特にこの小野木おのぎ 絹恵きぬえはこの街の市長で、妖怪や裏の関係を熟知している。

それ故に、雪華の事も重宝しており、良く依頼を回してくれる御得意様なのだ。

「ん……？ おい婆さん。今日は何時もより30万も多いぞ？」

60万って……何時もの2倍じゃねえか。普段は30万なのに、何で今日に限ってこんなに多いんだ。

まあ……理由は大凡予想が付くが、今回も厄介な依頼事か。毎回、特に死に直接繋がる様な依頼の時は何時も先に払ってくるからな。本人に言わせると、先に死なれて只働きされるのだけは嫌らしい。払う前に死なれては目覚めが悪いとか何とか……律儀だよな。

「それはとある依頼の前払いだよ。つい最近、儂の所に旧友から連絡があつてのう。お主を暫く借りたいと言ってきたんだよ」

羊羹を刺してはまた口に運び、モシヤモシヤと食べる絹恵。雪華は「やっぱりか」という顔をし、溜息を零した。

「で、その依頼者は何時頃来るんだ？」

「わからぬ」

「……はっ？」

分からないって……どーいう事だ？ こっちはもう金を受け取ってるんだぞ。

俺も暇じゃないし、ずっとこの街に居るとは限らない。現れるのなら、出来るだけ早くしてほしいものだ。

まあ、婆さんの旧友ってからには、相手も相当のお年寄りだと思うがなあ……。

「奴は神出鬼没だからもう。何、時が経てば直に現れるよ」

「……そうか、分かった。んじゃ、今回はそろそろお暇させてもらうよ」

「うむ、夜道は気を付けてな。特に、今日のような月が隠れた日はのう」

意味深に呟く言葉に紛れた忠告に、雪華は頷く。そのまま部屋を後にすると、玄関へと向かって行った。

序章（9）

暗い闇が世界を支配する真つ暗な空。唯一地上を照らす月は雲に隠され、今宵は何時もよりも濃い黒が彩っている。

一寸先は闇ばかりとはまさにこの事だ。人生と同じで、数メートル先は何があるのか分かりやしない。

「……………」

「……………」

そんな闇夜の中を雪華とアイリスは静かに歩く。静かに、静かに……足音は愚か、気配すら感じられない程静かに。

無色。今の彼等まさにソレだ。何色にも染められず、空気と同化する様に溶け込んでいる。

故に、例え人が通り過ぎたとしても誰も気付かず、そのまま横を通り過ぎて行く。裏に関わる人物以外は、だが。

「…………マスター」

「分かってる。向こうから先に姿を表すさ」

相変わらず、一步後ろを歩くアイリスに頷いて見せ、気付いていないフリをしながら唯々歩を進めた。

そうして数分間歩いて居ると、不意に暗闇の中から声が響く。

「止まれ」

その声に、雪華とアイリスは足を止める。否、停止させられた。背後から枯れたような低い声で制止命令を出されたのだから。

声には殺気が滲んでおり、相手が殺る気満々なのは直に解った。と言うか、常に戦いに身を置く者が解らない方がどうかしている。

「何の用だ？」

背後へと振り返り、出来るだけ優しい声音で相手へと問い掛ける。綺麗な声で……その声は男のモノと言うよりは、寧ろ女に近い高い音だ。

仮面を被っても尚、外から見えるその右眼は紅く、左眼は何故か閉じられている。その不気味な仮面の表情を見て、男は一瞬だけ息を飲む音がした。

「ホルスティア・ゲオティウスだな……？」

その名を口にした男の殺気が更に強まり、今にでも飛び掛かってきそうな勢いだっただ。しかし、雪華には暗過ぎて姿だけは目視出来ない。

声色からして、30代か40代の男性だろう。いずれにしても、雪華より年上だ。“外見”では、だが。

「双眸を暗視モードに切り替えます。……切り替え完了。敵戦力は1名、40代前半の男性。武器は洋剣1本のみです」

淡々と男の詳細を述べ、少しでも雪華が有利になる様に情報を伝えるアイリス。眼を暗視カメラか何かに変えたのだろう。

しかし、突如吹き荒れた一陣の風によって、アイリスの行為は全て無駄になってしまった。

空を覆っていた雨雲が別の場所へと追いやられ、その御蔭か、漸く月光が地上に届き、暗い闇を晴らしたのだ。

そして、闇に溶け込んでいた男の姿も露わになった。まあ、相手の面なんか見ても、「ああ……こんな感じだろうな」としか思えなかったが。

はあ……今日は早く家に帰りたいって言うのに……面倒だな。もういつその事誤魔化すか……。

いや、例え誤魔化したとしても、そのまま返してくれるとは思えないけどなあ……メンドイ。

「人違いだろう。俺は何処からどう見ても日本人だ。そんな外国人の名前何かじゃないよ」

「……そんなのはどうだっていい。本人なら願ったり叶ったりだ！ 違うのなら口封じで殺す……！」

男は背に帯剣した洋剣を抜き、得物を構える。敵を斬ると言うより

は、叩き潰す両手剣。その刃は、月光によって煌めく。

「ハア……どっちにしても面倒臭い事になったか……」

今にも殺されそうな雰囲気の中、雪華は嘆息を零す。アイリスも唯立ち尽くし、戦闘態勢には入ろうとはしなかった。

いや、そもそも。この男は戦闘態勢を取る間もなく、雪華達には簡単に殺せるのだから

序章 (10)

「死ねええええええええええ！！！」

男が足を踏み込み、両手剣を振う。その切先は月明かりで銀光し、空を細く鋭い線が瞬く。

そして、両手剣は雪華を捉えた。剣身が柔らかな肢体を叩き斬り、真つ赤な鮮血を撒き散らす。 筈だったが、

その刃は空を斬り、風を真つ二つに斬るだけだった。

「つ！？」

男の表情が余裕から一転して驚愕に変わり、瞠目する。双眸をこれでもかつ！　と言う程に見開き、辺りを見渡す。

男にとっては全く予測のしていないことが起きたのだ。

自分が予測していたビジョンでは青年が横一文字に斬り裂かれ、辺り一面を血に染め、自らも返り血を浴びる光景だった筈。

しかし、どうした事だろう。目の前の光景はあまりにも予測と違い過ぎた。青年達が煙の様に、一瞬でその場から消え失せたのだ。

「やれやれ……無駄な殺生は好きじゃないんだがなあ……」

今度は背後から、しっかりとした声が響き、それは空間に浸透する。男は背後を振り返り様に両手剣を凪いだ。

「まあ……これも世の為の殺生だと考えれば……無駄ではないかな？」

ニヤリと、仮面越しに笑みを浮かべ、辺りを肉が断たれる鈍い音が響いた。

鮮血が飛び散る。その量は、人間が生命活動を維持するのに必要な量だった。つまりは大出血。

その血の主は……両手剣を舐いだ男のものだった。彼は両手剣を鋭い切何かで斬り捨てられ、左肩から右腰に至るまで綺麗に斬り裂かれていた。

「が……ふッ!？」

何をされたのか理解出来ない。痛感で脳が麻痺し、満足に思考を回転出来ない、

唯一つ解る事……それは己ががこの青年に身体を斬り裂かれた事のみ。

「矢張り。お前が……ホルス……だったか……？」

「最初から違うと言っているだろ？ それは俺の本命じゃない」

「な……に……？」

「ホルスティア・ゲオティウス、これは仕事で使う偽名でな、俺の本名ではないんだよ。仕事が終わった今では、その名は単なる飾りだ」

雪華は笑う。死にゆく彼に、冥土の土産とばかりに怪しく、冷たく。その後ろに佇むアイリスは、終始無表情だが。

「俺の名は如月 雪華。親しい人では「せつちゃん」等と呼ばれるな。ああ、覚える必要はないぞ？ 何せ」

もう、俺の名を呼ぶ機会など、ありやしないのだから……。

其処まで聞き届けて、男の意識は永遠に戻らなくなった。

それを確かめ、雪華は1つの溜息を零すと、死体に手を翳す。

すると、男の亡骸を蒼い炎が纏わりつき、肉を、そして地面に付着した血痕も、何もかもを燃やし尽くした。

「おめでとう、とでも言っとくか？ これでアンタも、永遠の行方不明者の仲間入りだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181x/>

東方放浪録

2011年11月4日16時11分発行